名寄同窓会報

発行所
名寄市徳田204番地1
北海道名寄高等学校同窓会
事務局 TEL 01654-3-6842
FAX 01654-3-6841
発行人　会長 山崎博信
（名高4期）
印刷所　（株）北方印刷所

## 名高のカオリやニオイを

北海道名寄高等学校 同窓会長
（名高四期）山崎　博信

今年（二〇一二）7月、学校祭の終日、久しぶりに母校の名高祭で「舞台の発表」を観せていただきました。

実業の都合で、道路一本を隔てた南広場から出発する前夜祭の「行灯行列」が観ることが出来なかったので、最終日の午後の母校体育館をめざしました。

運良く玄関で教頭先生に、続いて校長先生にも紹介いただき、校長室で小憩。体育館での舞台発表を最後まで「鑑賞！」させていただきました。

とくにフィナーレに、舞台いっぱいの「先生と生徒諸君」との壁のない「群衆」。時代の変化に感じ入りました。

卒業生の皆様には、普段の日でよろしいですから母校に顔を出していただき、名寄高校のカオリやニオイを嗅いではいかがでしょうか。

## 後期高齢者の同期会

北海道名寄高等学校 同窓会副会長
（名高三期）橋場　利夫

私共の同期生は、昨年傘寿の年を迎へ今年からは、いよいよ80歳という大台に乗っての出発の年となった。まさしく晩年と云われる真最中の年を迎えた訳である。

最近仲間たちに会うと、ちなみに話題はお互いの健康を伺うところから始まるケースが多くなって来た。足腰の都合が悪いから始まり耳が遠くなった、目がうすくなった、血圧が高い、血糖値が高い、内臓疾患で現在通院中などなど自然と病気の話が中心となる。総じて振り返ってみると、60代の話題は孫の話が中心であり40代50代では子供の進路や就職、更には子供たちの結婚の話が話題となり更に男性は商売や勤め先の話の他、政治、経済、社会情勢など様々な話題の展開とへと広がっていく。

この様な同期会仲間たちの経過の中で平成16年の72歳を過ぎた頃に札幌定山渓ホテルの同期会を最後に全国ネットの同期会は高齢化に伴う健康上の問題や、ほとんどの人が現役を離れ年金生活者となった事などを勘案して、東京や北海道など遠い地方まで出かけての同期会は、発展的に解消して地方別、地域別で同期会を行う話が自然の形で方向づけられた。以来、最近の傾向としては東京方面では、東京を中心とした同期会が、北村知一、信原雄一、朝倉芳郎などが中心となって、年1回の開催が行われ北海道からも呼びかけに応じて何人かの人が参加しており、25名前後の参加者で盛会を極めている。又、北海道では全国ネットの同期会とは別にED会と云うグループによる同期会が30年近くも続いていると云う。

これは私共、名高三年生の時に始めて男女共学が導入され、AクラスからEクラスまでの5学級での編制スタートとなったが、生徒数のバランスの関係で男女共学はC、D、Eクラスの3学級のみのスタートとなりました。共学でないABの男子クラスからは、羨望の眼で見られながらのスタートだったと思います。わずか、三年生一年間の共学生活ではあったものの、青春時代の熱き思い出の名残がいつしかED会と云う男女共学の代名詞となって、今日でも年一回は、橋本政実御夫妻のリーダーシップにより旧交をあたためる機会として高齢になっても楽しく集いあっていると聞いて頼もしく思っている次第です。

この様な同期仲間の推移の中で今年は卒業して61年目を迎え高齢化社会の一員としてそれぞれの事情格差はあるもののまだまだ元気で晩年を楽しみながら頑張っている仲間も多い。そんな中で全国ネットの遠出の同期会は基本的には行わない事であったが、東京方面在住の仲間から今年は是非ふるさと北海道での同期会を全国合同で行って欲しいとの強い要請があり北海道での開催を引き受けることにした。

高齢者の集いとなる同期会でもあり、若い時の様な遅くまで酒を酌み交わしての宴会型からいたわりあう癒し形の湯治型の同期会とした方が良いのではないかとの発案で、企画運営には、橋場利夫、山口照夫、太田正男が中心となり様々検討した結果、北海道の中心的温泉といえば、登別温泉が考えられ、9月2日、3日、4日の二泊三日で開催する事にした。

200名以上の同期仲間、約170名の友に住所の確認や健康上の情報を収集して案内状を送付した。どれだけの方が参加してくれるかは、未定ですがこの会報が同窓会の皆さん方に渡る頃には結果が出ているものと思います。今回の同期会の発起人としての参加目標の上限は50名、下限では30名として案内状を送付したところであります。後期高齢者という響きの悪い呼び名ではありますが、想い出深き旧友達との集いを楽しみに筆を走らせております。

ちなみに後期高齢者の同期会はどうなるのか心配でもある、認知症とまではいかないが、今では物忘れが一段と激しくなる年代でもあり、日常生活においても人の名前や大事な用件でもつい忘れがちになり、あれはあれあれだと思い出すのに時間がかかる。思い出せれば結構だが、思い出せないのが当たり前のようになれば認知症の入り口まで来ているのかもしれない。ともあれ久し振りの再会でこれからの人生において大きな活力剤となれば今回の同期会も大成功と云えるのではなかろうか。

話題は変わるが、名高同窓会と云えば特筆すべきグループがあるので紹介しておきたい。それは、名高バスケット部のOB、OGの集いである。1973年（昭和48年）に第1回目が札幌市清華園で開催され最初9名の参加から始められた。中心者は名高第1回卒業生で初代バスケット部のキャプテンの松山寿一郎（元名高同窓会札幌ピヤシリ会会長）と第4回卒業生の大泉一隆が永い間この役を担っていた。以来、毎年開催され多い時には30名のOB、OGが集い楽しく開催された事もあった。この会の中心的参加者は第1回～第8回までの名高卒業生のバスケの部員達であり高齢化が進み、此の伝統あるバスケOB、OG会の火を消さないように若手のリーダーに切り替わる必要との考えから第十五回卒業生で名高バスケット部の部長として活躍した平林寛さんに、今年40回目の節目となる此の会の会長をお願いし、名高教師時代のバスケの教え子との人脈を掘り起こしていただく事にした。又此の会の支えとなる事務局には、平林さんの教え子で名高第42回卒の湯川孝一さんにお願いすることになった。そして今年は此の会の集いは久し振りで札幌での開催となった。

今後、此の会の運営は更なる若い人への移行が進み、継続は力と云われる為にも名高発展への礎となるよう期待したい。

歴史ある名寄高等学校や同窓会もその歴史の中で、数々のエピソードやドラマがあったものと考えます。年に1回の同窓会会報を通して様々な情報が報道される事を期待しております。

# 同窓会事務局長をしていた五年間を振り返って

同窓会副会長　柳原　逸夫

私は平成九年四月に旭川東高校から母校名寄高校へ赴任しました。最初の二年間は同窓会事務局に拘わっていませんでしたが、事務局長をしていた平林寛先生が転勤されたので、その後を引き継ぎ平成十一年四月から平成十六年三月までの五年間、事務局長の任に就くことになりました。平成十四年の創立八十周年記念が目前に迫っていた時期でありましたから、自分に事務局長が務まるかどうか不安もありました。

［平成十一年度］

それまでの同窓会は入会金と総会の剰余金を併せた百二十万円程の予算で運営されており、同窓会活動をさらに活発にするためには運営予算の増額が必要でした。そこで、「終身会費四千円を入会時に納付する」とした会則の改正案と、各支部や各期同期会に対して「維持協力金の納入」をお願いすることを総会に提案して認めていただきました。

同窓会報は昭和三十六年の創刊以来毎年三月に発行されてきましたが、年度末の発行は何かと忙しく、平成十二年度の会報から発行日を七月一日に変更しました。さらに、紙面はA四版からB四版にかえ、ページ数も増やして会報の充実を図り、また、紙面広告を同窓生から募って載せることにしました。

七月には創立八十周年に向けての「同窓会周年記念事業準備委員会」を発足させ、協賛会の設立や周年記念事業等の検討をはじめました。一方、協賛会設立前に「名高八十年史」の編纂・編集の委員会を十月にたちあげて、この委員会を協賛会設立後には「記念誌編纂部」として継続することにしました。

［平成十二年度］

六月には全国各支部の支部長事務局長・本部役員・同窓生の代表・学校関係者が出席して「八十周年記念事業協賛会」の設立総会が開かれました。その総会では、協賛会長に同窓会長を選び、周年記念事業準備委員会からの提案事項「会則、役員、二千五百万円を目途とする記念事業計画等」が承認され、そして、周年記念式典と祝賀会が平成十四年十月に実施されることが決められました。また、設立総会の前に全国支部長・事務局長会議を開いて、各支部の状況報告と八十周年記念事業について意見交換が行われました。

十二月には長い間下川支部長をされていた平肇氏が逝去されて、同窓会を代表して会長とともに葬儀に参列し、また、会報に「下川支部事務局長の弔辞」を掲載して弔意を表しました。

［平成十三年度］

五月の同窓会役員会において、「名高同窓会名簿」が前回発行業務を委託した廣済堂から平成十五年六月に発行されることが決められました。

八月には「協賛会常任理事会」を開き、各専門部会（総務部・財務部・事業部・行事部）で協議された内容を承認して、記念式典と祝賀会の期日を平成十四年十月十九日とした。

十月には近隣市町村に対して協賛会補助金の交付申請をしました。

［平成十四年度］

六月には「同窓会常任幹事会」を開いて、名簿の住所確認と協賛募金ハガキの発送を各期幹事に依頼しました。

会報第三十五号（12P）は創立八十周年記念特集号として協賛会から発行して、それには「協賛会長などの祝文、八十年教学の軌跡、同窓生の回想記、同窓生の記念広告、記念事業報告、協賛会活動報告等」を掲載して、周年記念特集にふさわしい内容にしました。

十月十九日には午前十時から名高体育館で記念式典を、午後十二時三十分からグランドホテル藤花で記念祝賀会を開催しました。

平成十五年度から校舎改築工事が始まることになり、七十周年記念事業で建築された同窓会館（白楊館）は全面的に建替移築することになりました。会館の設計変更が可能になり、玄関の位置を変えるなど新しく展示室や資料室をつくることにしました。

［平成十五年度］

一月には協賛会の解散総会が行われ、協賛会常任理事会の提案事項（収支決算、記念事業、八十年史の今後の取り扱い、決算後の会計等）が承認されました。

会報第三十六号（12P）には記念式典・祝賀会及び記念事業協賛会の解散総会の報告記事を掲載して、平成十一年度から取り組まれてきた八十周年記念事業の総括とさせていただきました。

以上、五年間の同窓会事務局が手掛けた事柄を列挙しました。

私は平成十六年三月をもって定年退職して同窓会事務局長を辞することになり、五年間の在任中は多くの同窓生の皆様に支えられて、大過なく同窓会事務局長の任を終えることが出来ました。誠に有難うございました。

また、平成十五年度の同窓会役員会で副会長に推薦された時には、退職後も名寄に在住しますので、少しでも同窓会に協力できればとの思いで気軽にお引き受けしましたが、退職して八年が経ちますと、副会長の重さをひしひしと感じております。これからも微力ではありますが名高同窓会発展のために努力したいと思います。

最後になりましたが、会員の皆様方の益々のご活躍とご多幸を祈念申し上げます。

# 名寄高校の今

北海道名寄高等学校長　千原　治

本校は、大正十一年に北海道庁立名寄中学校として呱々の声を挙げてから満九十年を迎え、今年度は九十一年目の年となります。

この間、名寄高等女学校の創立、戦後の学制改革、商業科の設置・閉科、工業科の設置・分離独立、定時制課程の併置・閉課など、幾多の変遷を経て今日に至っており、その歴史の重みを感じております。

この場をお借りして、現在の名高についてご紹介申し上げたいと存じます。

生徒数は四百五十六名、定員四百八十名を少し満たしておりませんが、生徒達は本校の教育環境の中で生き生きと活動しています。一学年四学級規模の学校は、教育の機能においても、施設の整備においても、贅沢を言わなければ過不足なくそろっておりますので、恵まれた教育環境にあると言ってもよいでしょう。多彩な種目をそろえた部活動等の加入率は87.1％で、ほとんどの生徒がなんらかの課外活動に取り組んでいます。今年も多くの部が全道大会に駒を進めました。その中から、陸上部の生徒二名がインターハイへの出場を決めたのは喜ばしい限りです。新聞局は十一年連続（十二回目）で全国高総文祭に出場しています。スキー部も全国大会の常連校です。

私は名高生の姿を地域の皆様に見ていただきたいと思っています。高校生が様々な場面で活躍している姿は、地域に元気と勇気を与え、高校生も地域の方々の声に励まされるに違いありません。名高祭はその絶好の機会です。今、全校生徒が一丸となって取り組んでいます。また、ボランティア局にも目を見張るものがあります。自らのボランティア活動だけでなく、学校全体のコーディネーターとして個人や部活動でボランティア活動ができるよう取りまとめをしています。まだまだありますが、スペースの関係上割愛いたします。

同窓会会員の皆様、機会がありましたらどうか母校にお越しください。そして、後輩である生徒に声をかけてください。本校生徒達は満面の笑顔と節度ある態度でお応えできるものと確信いたしております。

## 名高３期同期会

平成２３年１０月２日に名高３期の傘寿祝を兼ねた同期会が行われました。当日は菊地健次郎先生（名中１５期で昭和二十二年～四十一年三月在任されました）にもご参加いただき３０名で華やかにおこなわれました。その様子を橋本政實氏により後日制作されたアルバムより紹介させていただきます。

名高３期有志同期会 ALBUM
平成23年10月２日 於 札幌すみれホテル

３期村山建夫氏描く
アルバムのためのオリジナル画の表紙

## 名高三期傘寿を祝う会にて

菊地　健次郎

カラオケが賑やかに始まる前にそばに来た坂井礼夫君が「いっしょは一緒で一諸ではないよね。奥の細道はいまも一番好きです。」と言った。また、或る人は「誤ちすな。心して下りよ」は本当に味わい深い言葉だね。」と言った。これは「徒然草」の第百九段で、木登りの名人として有名な男が、人を指図して梢を切らせた時に軒の高さほどになって言ったという有名な文の一節である。卒業後六十年になっても覚えているのに感心させられた。

また、道斎君が富良野時代に私に熊の彫刻を呉れたことを思い出して話したり、木原夫妻が旭川を訪問した折のアルバムを見せて呉れたことも心に残った。

飲んだり、たべたり、語り合ったり、歌ったりしている間に三時間ぐらい経過して御開きとなり、二次会は森山君の「ダメおやじ」で十数人が行って十二時ごろまで続いたという。本当に楽しい会だった。森山君に感謝。

## ＝わが傘寿会＝　あれこれ

太田　正男

定刻四十分前、会場「すみれホテル」に到着。「こりゃ少々早過ぎしか」とも思ったが、「エーッ、ままよ」と三Ｆ会場へと向かう。

受付女性群に、杖をたよりのご対面。「そこなる杖姿は何ごとゾ」と問われ「孫息子と遊歩中、ズッコケたり。」間髪を入れず「デ、孫どのはいかになるや。」小生「異常なし。」並いる連中「ソレは何より…」大笑なさる。何と見事な応酬であろう。小生、これでこそ足引きずって参加した甲斐ありと得心。我三期女性各位のたくまざる機知とユーモアに温かく迎えいただき、大いに感激。

男性群の座する所へと歩み寄る。橋本、市川、桑原、相場、小林　等々、なつかしの面々としばし旧懐談に花咲く。突如、橋本氏しおりを手にし「斧鉞」を読めとの問い。「フエツ」は幸運にも語いに有りホッと一息。

開会に至るや、勧進元？森山氏の隠し玉二連発。しかも、超重量級ときた。その一、菊地健次郎先生の御来席。その二、鹿児島に居をなす小笠原克美君の紹介。会場に響く拍手が歓迎の表示だった。

宴たけなわとなり、応援団の猛者連の演舞。楽器をかかえて巡り歩いたバンドの面々が思い出の一端を披露する。加えて全員が歌う往時のなつかしのメロディー。仕掛人一同の心憎いばかりの配慮に頭（こうべ）たれっぱなし…。

山口氏の堂々たるまとめの言葉、続く一本〆に参加者一同再会に思いを馳せたことであった。

「老い」は容赦なく忍び寄る。すでに多数の友が幽明鏡を異にしている。納得できる「老い」の日々を送りたい。そのキーワードは“自立”である。思いを共有するためにも再会を願うこと「切」である。

＊「斧鉞」は、旧名中の校歌三番の歌詞の言葉です。

＊名寄高校の名の下、男女共学で募集されたのは、この名高三期生からです。新制高校としての一期二期生は名寄男子高校と名寄女子高校として募集されました。

燦燦（３・傘）女性合唱団！！
旧名高女校歌を歌う

ミミミーファ　ソーラー　シシシード　レレソ♪♪
今、札幌のホテルに名寄ハイスクールの校歌が響いた。
いつもながらの「清く流るる天塩川」のあとをうけ、即席の「さんさん合唱団」熱唱。わが女性陣、傘寿になってもオールソプラノ　若い若い。
（会の栞に歌詞を載せてはいたが、字が小さく不評、申し訳なく反省しきりナリ。）

米寿を迎えた菊地健次郎先生が出席され
世話役、森山君も大感激。ハテどちらが先生……

このアルバムは同窓会館に
展示させていただいています

# 今のこと昔のこと

名高五期　森越　孝延

CDに、よみがえった名高校歌（試作）
追悼集《春まだ浅く》から

現在の校歌の前に、もう一つの校歌があった。それは「校歌（試作）」と呼ばれていて、歌っていたのは多分私たち五期生と四期生、六、七期生ぐらいであったろう。殊に五期生は歌う機会が多かったので、これがレコードになり、更にCDになった経緯をお話します。

この校歌は私たちが二年生の時に生まれた。昭和二十七年一月三十日発行の「名寄高新聞」第三号には、「歌詞」と共にトップ記事で報じられている。それまでは、旧制名中、旧制名高女の校歌が併存していて、学友会の先輩たちから、早く新校歌を制定して欲しいとの要望が校長先生へ出されていた。

この前年に佐藤徳山校長先生から、勝承未先生へ作詞を依頼してあったけれども、完成までのあいだの試作として、本校の小池榮壽先生が作詞され、渡邊正先生が作曲されたのであった。

試作が発表されてから直ぐに全校で練習が始まったが、公式行事として最初にこの校歌（試作）が歌われたのは、三月に挙行された四期生の卒業式の時であったろう。続いて四月に行われた七期生の入学式、更に私たちが三年生の六月の運動会で、またNHK旭川放送局から電波にのった「我が校の誇り」の番組の中で、そして九月の文化祭の時などに歌われてきたのであった。

翌十月に、現在の校歌が制定された後は、この校歌は「名高歌」の名称で残していくことになった。私たち五期生が在学中に歌う機会が多かったのは、どちらかと言えば校歌（試作）＝《名高歌》の方であったろう。この歌詞は次の通りでした。

名高校歌（試作）
小池榮壽　作詞
渡邊　正　作曲

一、きわみなく通ずる道は
わが前に開けたり名高
眉活き若人群れて
青雲の棚びくところ
遥かなる希望は燃ゆる

二、天地（あめつち）を貫く真理
一すじに求めゆく名高
天塩川静けきほとり
豊かなるピヤシリ仰ぎ
知慧深き思索を磨く

三、永劫の至誠に薫る
旗職（きし）高く掲げたり名高
風雪も何かはあらん
和の光あまねく映えて
輝やけるわれらが母校

さて、歌詞はこの通りだが、一体どんな曲だったろうか。

歌詞は、文字に書かれて残ることがあるけれども、楽譜の場合は余程の専門の人でない限り、書き写されて残ることはない。現在の校歌が制定され、当時の生徒が卒業した後は、歌詞も曲も次第に忘れられていったようである。

ところが四半世紀ほど後の昭和五十五年三月に、《春まだ浅く》の題名で刊行された「渡邊正先生追悼集」の中で、「校歌（試作）＝名高歌」の楽譜がよみがえった。

それには次のような事があったのです。

校歌（試作）を作曲された渡邊正先生は、ご存じのように音楽の教科を担当されていた。私は一年生の時に《音楽》科目を選択して教わったけれども、音楽部にいた方は、もっと深いご指導を受けられて良くご存じであろう。

しかし、昭和五十二年三月に定年で長年教鞭をとられていた名高を退職されてから、一年の間も置かず、昭和五十三年三月二日にご病気で不帰の人になられた。

先生を慕い、あまりにも早過ぎるご逝去を悼んで、元生徒の有志の手により追悼集を三回忌に出版することになった。

追悼集の文集は、旧制名中の最後の校長であった三島孚滋雄先生、名高初代校長の佐藤徳山先生、渡邊正先生を旧制名中時代に教えていた森英策先生と坂井武先生たちを初めとして、六十数名の方々から多くの追悼文や思い出のスケッチ、写真、書簡が寄せられた。

一方、先生の「生きたお声」を伝えよう、と企画されたレコードの制作は、奥様から先生の声が録音されたリールテープをお借りして先生の謝辞の言葉、独唱や作曲されたメロディをレコード（東芝）のA面とB面に編集録音をした。

内容は次の通りです。

A面　渡邊正先生のご挨拶
時　＝昭和五十二年四月九日
場所＝名寄　ホテル藤花
《先生に感謝する会》での謝辞

B面　①渡邊正先生のテノール独唱
曲目　《埴生の宿》
②「春まだ浅く」
演劇《若き日の啄木》の劇中歌
石川啄木の詩を先生が作曲
③名高校歌（試作）＝名高歌
作詞　小池榮壽
作曲　渡邊　正
④名寄工業高等学校校歌
先生が作曲、ピアノ伴奏と独唱

編集作業を進めていく中で、文集には是非とも掲載したいし、またレコーディングもしたい曲なのだが、相当の年数を経ているせいか、その楽譜を見付けることができずに苦心したのが二曲あった。「校歌《試作》」（昭和二十六年作）と「春まだ浅く」（同二十二年作）の楽譜である。

編集会議の結果、止むを得ないので、編集委員の中で「校歌（試作）」を覚えていた私たちが歌唱し、それを三期生の中辻祥治さんが採譜して楽譜を作成された。更にその楽譜により、三期の田中桂子さんがピアノ伴奏をされ、中辻さん、同じく三期の中田正良さんと私とで斉唱してB面の③を録音したのである。

また、劇中歌の「春まだ浅く」は、一期生でこの演劇に関係した方が、カセットテープに吹き込んで東京から送ってきた歌を聴いて採譜し、その楽譜を文集に載せ、テープの歌声をレコードのB面②に納めたのであった。

こうして幻だった「校歌（試作）」と劇中歌「春まだ浅く」の曲は、よみがえったのであった。

四、五年前に、私は名高校舎の前に建っている白楊館（同窓会館）の整備委員を委嘱されて何回か同館を訪れたことがある。寄贈されている書籍や書類を整理している内に、かつて発行した《春まだ浅く》渡邊正先生追悼集」のレコードが、四半世紀を経た今では蓄音機（プレヤー）の数が少なくなって、日常的にレコード

を聴ける状態で無い事に気付いた。それでこの作業とは別にレコードをCD化する企画をたてることになった。

その規模をどの程度にするかを検討したけれども、様々な事情があり、先生の三十三回忌が明年（平成二十二年）でもあることから、少ない枚数を自家製でCD化した。そして元編集委員の方々に試聴して頂き、ご遺族の方々に贈呈して先生の霊に捧げた。

このCDは、名高の白楊館を初めとして、名寄市立図書館や名寄市北国博物館へも寄贈してあるので、多くの人々に聴いて頂きたいものです。

さて、「追悼集」には《春まだ浅く》の題名が付けられている。それには幾つかの理由があった。レコードB面②の劇中歌「春まだ浅く」の作曲（昭和二十二年作）は、恐らく先生が旧名中に奉職されてから初めての作曲であろう、という事。そして定年で退職された先生が、これから次の人生を歩もうとされて、まだ日の浅い時のご逝去であった事。更に急逝された三月は、雪深い北海道では未だ春の浅い日であった事などが編集委員の間で話し合われたのであった。

「追悼集」に関しては、以前に会報「アカシア」第十九号（平成六年六月発行＝同窓会館に展示させていただいています）の『青春雑記』に寄稿しており、それと重複するが、啄木の初期の作品「雲は天才である」の中の《春まだ浅く月若き……》の詩には、他にも二人の作曲者がいる。

『石川啄木記念館』のリーフレットによれば、その一人は古賀メロデーで有名な古賀政男氏で、昭和十一年の日活映画『情熱の詩人啄木』の伴奏として作曲したという。そしてもう一人は、戦後になってから、渋民小学校（啄木の出身校）の校歌として、新たに清瀬保二氏が曲をつけたという。

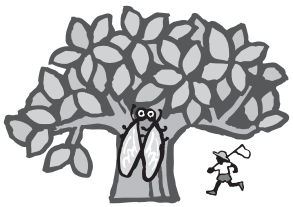
『石川啄木記念館』には「《春まだ浅く》渡邊正先生追悼集」を以前に寄贈してあるから、同館には三つの曲があることになる。いや、この詩歌に寄せる思いから、その後、もっと多くの人々から作曲が寄せられているかもしれない。

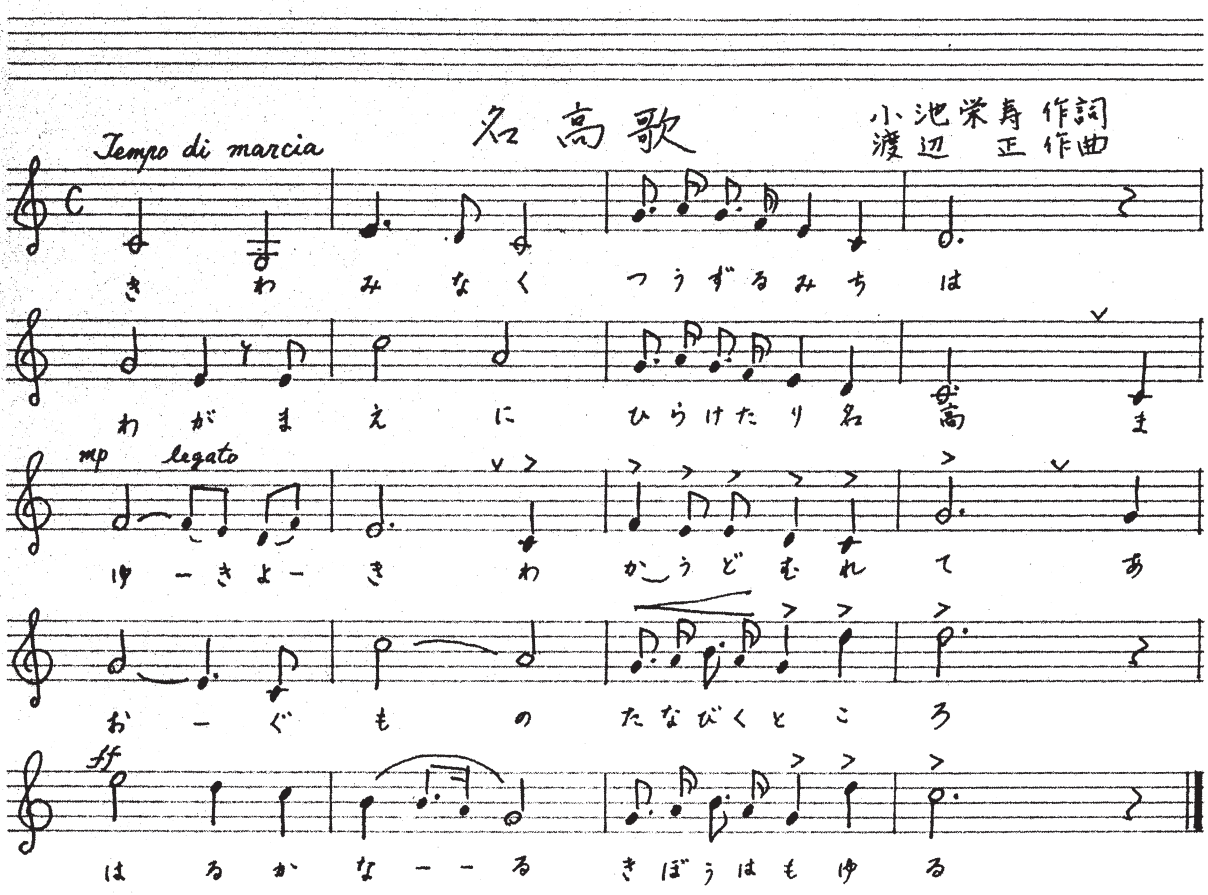
先生は名寄市内と近辺の小、中、高等学校の校歌を十数曲も作曲されている。その他に記念歌として、名寄町開基五十周年歌（昭和二十五年）や下川鉱山音頭（同三十年）、名寄市制施行協賛歌（同三十一年）、独立五十周年記念下川町歌（同四十九年）、下川讃歌（同年）、美深音頭（同年）、美深小唄（同年）更に職場の労働歌、応援歌などを作曲されている。

作曲された年からみて、これらの歌を知っているのは私たちの年代が最後かも知れない。道北の文化活動の一環として、これらの歌詞と楽譜が永久に保存されれば嬉しい事です。

了

＊以上は、名高第五期同期会会報「新アカシア」第十号（二〇一一年一〇月一日）より転載させていただきました。





# 平成二十三年度 名高同窓会総会・懇親会実施される

## 総会・懇親会盛会に終了

平成二十三年度名寄高校同窓会総会・懇親会が去る平成二十三年十月十四日（金）に例年通りグランドホテル藤花において約百三十名の参加を得て行われました。

総会では、山崎博信同窓会長、千原校長が挨拶をしてから議事に移りました。二十二年度の各報告、二十三年度の計画等、全ての議案が承認され、無事に総会を終えることが出来ました。参加していただきました会員の方々のご理解とご協力に心より感謝いたします。

総会後の懇親会は、当番幹事である名高二十七期、三十七期、四十七期の方々のご尽力で盛会に行われました。協賛いただきました各商社様には、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

挨拶をする山崎同窓会長

挨拶をする千原校長

監査報告をする梅野監査

## 平成23年度同窓会

挨拶をする奥村当番幹事長

毎年総会を見守る応援団旗

乾杯のご発声をする小山札幌支部事務局長

万歳のご発声をする名取先生

猿谷幹事長

## 平成23年度 協賛商社一覧

敬称略順不同

| | |
|---|---|
| 鈴木写真館 | 柴田時計店 |
| 木賀商店 | 志水商店 |
| 北方印刷所 | 黒川商店 |
| 北星信用金庫 | 宮崎・靴スポーツ |
| 北昭産業 | 喫茶　ブラジル |
| 北海道電力 | 吉川印刷 |
| 梅野博・新事務所 | 喜多印刷所 |
| 梅村商店 | 喜信堂 |
| 湯川名文堂 | (有)庄司鉄工所 |
| 東洋肉店 | 三つ橋農産 |
| 東洋製麺 | まごころ弁当 |
| 定木税理士事務所 | ベスト電器駅前店 |
| 辻薬局 | ダスキン滝沢 |
| 池田薬局 | スタジオ稲場 |
| 大野組 | 昭和産業 |
| 村西運輸 | サバト家具店 |
| 倉澤組 | グランドホテル藤花 |
| 石田商店 | カメラの写楽 |
| 青野海産物店 | かまくん本舗 |
| 清水金物店 | いろは肉店 |
| 須摩スポーツ | アキ写真店 |
| 森実商店 | (株)坂下組 |
| 新光電気 | はらドライクリーニング |
| 松前陶器店 | |

## 懇親会の一コマ

ジャンケン大会

ジャンケン大会
優勝 中枝副会長

# 進め！学校新聞

平成二十四年四月の讀賣新聞北海道版に四週連続で名高新聞局の記事が掲載され、名高の様子が紹介されました。その一部抜粋を掲載します。

## 歴史を伝える「シラカバと碑」

JR宗谷線・名寄駅から南に約２・４㌔行くと、シラカバ４０３本が周囲約一㌔の校地を囲む名寄高校（生徒４５６人）が見えてくる。名寄市の木でもあるシラカバは、名寄高校が名寄工業高校と分離され、現在地に移転した１９７５年から２年間に、環境整備で在校生が植樹した。運が良ければ、冬の厳寒期に幻想的な樹氷も見られる。「とても奇麗で感動する」と野平剛史君（３年）。

７８年卒のOB（30期）で現在、保健体育科の丸山功先生（52）は「移転当時は水田が広がるだけで寂しかった」と振り返る。自らもシラカバを植えた丸山先生は「生徒全員で一生懸命、植樹しただけに、ここまで育った姿を見ると感慨深い」と語っている。

校地西側は夏、一面のヒマワリ畑になる。名寄市は至る所にヒマワリ畑があり、昨年公開された西田敏行さん主演の映画「星守る犬」は、約６・５㌔離れたサンビラーパークのヒマワリ畑でロケを行っている。

校門を入ると、左手に「健児」の碑が立つ。前身の旧名寄中学校は１９２２年（大正十一年）開校。碑名は旧中学の生徒組織「健児会」に由来しており、名寄高校開校８０周年を記念して建立された。

この横にある「六華（りっか）」の碑は、27年（昭和２年）に開校した旧名寄高等女学校の創立50周年記念で建立された。旧高等女学校は新制高校と50年に統合、現在の名寄高校になった。さらに隣が、93年に歴史を閉じた名寄高校定時制課程の「朔燈（さくとう）」の碑だ。

毎年夏、この周りで練習する吹奏楽部の桑原麻莉さん（３年）は「三つの碑は存在感があり、高校の歴史を感じる」と話している。

市街地から離れ、自転車通学が多い名寄高校では、冬期間（11月末～３月末）、地元の「名士バス」が通学バスを運行している。当初は登校時と授業終了後だけだったが、「部活動終了後の下校バス」について新聞局が行ったアンケート調査で希望者が多く、３年がかりの働きかけで、２００１年から午後６時半発の運行が始まった。

ところが、予想より利用が少なく、翌年に廃止。新聞局は再びアンケートを行い、25人以上の乗車を見込んで運行が再開された。それでも、各部の活動状況によって25人を割る日があり、名士バスの厚意で運行されている。女子バレーボール部の松本彩恵さん（２年）は「廃止になると、JRに間に合わないので大変困る。もっとバスを利用して」と呼びかけている。

（新聞局長　３年神藤綾巳）

## 市民も注目！名高祭

### 行灯行列、前夜祭

名寄高校最大の行事は、週末に３日間実施される「名高祭」である。初日の金曜午後、開祭式が行われ、行灯行列と前夜祭（ファイヤーストーム、フォークダンス、合唱、花火）となる。続く土日にクラス展示や演劇、のど自慢など数々の企画が行われる。

祭りのメーン企画は行灯行列。各学年４クラスの計12クラスがそれぞれ２週間かけ、内部に蛍光灯が入った行灯（高さ３☒、長さ６☒、幅２☒）の本体とカラフルで明るい背景の「ステンド」を、針金や和紙、セロハンで作り上げる。

行列のコースは、学校から名寄市街地を回る約６キロ。「燃えろ、燃えろ、1B」などと声を出しながら、１基を生徒20人以上が担ぎ、12基が途中の休憩を含めて約３時間、名寄の夏の夜に輝く。沿道には毎年、観客が大勢集まり、市民の注目度の高いイベントだ。

行灯行列は１９５５年の第６回名高祭から始まった。76年卒（28期）のOB、理科の伴井善明先生（54）によると、75年頃、背景のステンドはなかったものの、動物や人物などをデザインした本体が、動くよう工夫していたという。「蛍光灯の代わりにろうそくの火を使っていたため、行灯が燃えてしまうアクシデントも何度かあった。消火器を持ち歩くのは、当時の名残」と話してくれた。

７月６～８日に予定される今年の名高祭について、学友会（生徒会）会長の毛利優輝君（３年）は「各クラスで団結し、今まで以上のものを目指すので、どうぞご期待を」と意気込みを語った。

（新聞局員　３年菊地歩吹）

## 進め！学校新聞

### 放課後もいきいき活動
### 昨年度、八割強が部活加入
### スキー、吹奏楽 輝く実績

名寄高校の部活動には、体育系十四部、文化系四部のほか、クラス局員も活動する新聞局など五局がある。新入生が入部前なので、今年度の部活動加入率はまだ出ていないが、昨年度は８５・６％だった。

体育系で昨年度、部員が一番多かったのは陸上で、41人。続いて男子バスケットと男子バドミントンが各25人、野球が

24人だった。部員9人（現在5人）と決して多くはないが、1923年創部のスキー部は、全国大会で輝かしい記録を残してきた運動部だ。

今年1月30日から山形県・蔵王で行われた全国高校スキー大会には、卒業した当時の3年生3人とともに1、2年生4人が出場した。182人がエントリーしたクロスカントリー・フリー男子15㌔部門で、1年生だった安藤翼君は48位と健闘、2年生だった富岡志文君が74位。安藤君は同・クラシカル男子10㌔部門も50位で、男子リレーメンバーになり、36校中17位。女子は1年生だった石垣楓さんがクロスカントリー2部門で善戦した。

安藤君は、3月に新潟県妙高市で行われたJOCジュニアオリンピックカップ全日本ジュニアスキー選手権大会でも、クラシカル男子10㌔の高校部門で111人中22位。「来年は10位以内に入賞できるよう体力と技術を向上させ、積み重ねを大事にしたい」と決意を語っている。

夏はランニングやローラースキー、十勝岳登山合宿で足腰を鍛えるスキー部には、「良きスポーツ選手の前に、良き名高生であれ」というスローガンがある。部長の富岡君は「普段の学校生活を大切にし、活動できることに感謝して、より良い結果を」と話した。

体育系・文化系を含めた校内最大の部は吹奏楽部で、昨年度の部員は52人。現在、3年生14人、2年生18人が活動している。北海道吹奏楽コンクールの常連で、昨年度は銀賞、2010年度は金賞の実力だ。

普段はパート練習中心で、改善点を細かく調整、個々の力を伸ばす工夫をしており、先輩・後輩の隔てなく、演奏について話し合える雰囲気もある。部のテーマは「美音協奏」。OBが作った言葉で、部長の白幡玲奈さん（3年）は「美しい音を出せるよう努力を惜しまないこと。協力し合って良い演奏をすること。演奏で大事なことを忘れないためのテーマ」と説明する。

今年度の目標については「東日本学校吹奏楽大会への進出」ときっぱり。演奏会を増やし、本番の雰囲気に慣れるのも課題という。

部活動ではないが、会員23人が放課後、週1～2回の調理実習のほか、保育所訪問などの活動を行っている家庭クラブもある。昨年9月の北海道高校家庭クラブ連盟研究大会では会長の樽石歩美さん（3年）が「ドレス・リフォーミング」のテーマで発表し、アイデア賞となった。樽石さんは「スピーチの時、かなり緊張したが、思ったよりちゃんと話せた。良い経験になった」と話している。

（新聞局長　3年神藤綾巳）

## 積極的にボランティア

積極的なボランティア活動も名寄高校の特徴だ。各クラスで選ばれた局員12人を中心とするボランティア局があり、毎年5月に緑の募金、10月に赤い羽根共同募金を行う。昨年度は名高祭でベルマークを集め、2月には、800個でポリオワクチン一人分になるエコキャップ回収運動も行った。

局長の芝野裕也君（3年）は「部活動で忙しい中、局員以外も自主的に集まり、真剣さを感じた」と語った。東日本大震災では、校内や吹奏楽部の定期演奏会で募金を行い、18万円余りを寄付。顧問で英語科の大沢宣達先生（36）は「被災者支援の気持ちを忘れないことが大切」と話す。

部ごとのボランティアも盛んで、吹奏楽部は練習後に毎回、校舎を清掃。部員たちは「支えてくれる皆さんへの感謝の気持ち」と説明する。3年前から5月に、通学路などのゴミ拾いを行い、昨年は大型ビニール袋5袋分になった。今年1月には、学童保育所でミニコンサートも開催。「いつもと違う演奏会」と部員に好評だった。

一方、野球部員17人は1月に障害児と家族の交流会にボランティア参加。谷田康真主将（3年）は「子どもたちと触れ合えた。今後も参加したい」と意欲を見せる。陸上部も、部員13人がボランティア局のエコキャップ回収運動でシールをはがし、汚れを落とした。簑島咲耶さん（2年）は「子どもたちの命を救えると思い、1枚1枚丁寧にはがした」と話している。

（新聞局長　3年神藤綾巳）

## 同窓会報第46号の原稿募集

平成25年7月25日発行予定の同窓会報46号の原稿と広告を募集しています。会報の掲載内容は、同窓会各員や各支部地区役員の原稿、同窓生個人の原稿、旧職員の原稿、支部だより、同期会だより、同窓生の活躍状況などがあります。寄稿先は事務局（TEL　01654－3－6841　名寄高校　伴井）までご連絡下さい。原稿用紙等をお送りいたします。（原稿は各自のパソコンで作られたものでもかまいません）写真は使用後に返却いたします。

今後も、同期会だよりや同窓生の活躍状況などを積極的に掲載させていただこうと考えていますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

## 平成24年度及び25年度総会日程

今年度（平成24年度）の本部総会・懇親会は、平成24年10月12日（金）18時30分からグランドホテル藤花で開催されます。当番幹事は、名高28期、38期、48期と名高定24期の方々です。

また、来年度（平成25年度）は、名高29期、39期、49期と名高定25期の方々による当番幹事で、平成25年10月11日（金）18時30分からグランドホテル藤花で例年通り開催される予定です。